

ペン俳句会 句会報(第三七三号)

令和七年九月四日(木)

兼題『虫全般』、席題『渡』

句会を、先月八月と同じ場所で開催。投句九名。

出席八名。(欠席は良知さん、金魚姫さん)

中村 晃也

夕顔の萎れるころの別れかな

秋あかね古墳の主は渡来人

楔文字砂に遺して鳥渡る

秋暑し出口ばかりの蝉の穴

深みます空の蒼さやいなご老ゆ

かなかなや故郷を捨てし峠道

松田 一文字

閑寂や滝つぼの水碧く澄み

火の粉浴び手縄あやつる鶴匠かな

汽車往きてまた虫すたく闇の原

東山に昇れる月や渡月橋

秋立つや竹林ぬける風の音

夏富士や雲のてぬぐひ首に巻き

宮原 凧

炎昼や渡る人無き歩道橋

終活を急かすごとくに蝉時雨

逝きし人銀河を渡り逢ひに来よ

追憶のあまた吾にあり夕端居

流れ来る読経の響き彼岸参り

打ち水や一陣の風吹き抜けし

大津 そうかい

蓑虫や終の栖の吾に欲し

献杯や今宵は飲まん醉芙蓉

間に合ひし矢切の渡し秋夕焼

蜻蛉の精霊めきて湧ける浜

新涼やアポロン生るる朝シャワー

秋の日のゆらめくごとく蝶舞へる

新田 ゆふき

ふらここを揺らす空蟬昼下がり

終活や日記読み終ふ夏夕焼

雷とどろメタセコイヤの枝裂きぬ

夏草の更に緑や蔓の先

彼岸寺へ観音の道蟬時雨

油虫背後に光る眼のあるか

浜口 金魚姫

花野中妣が袖振る風渡る

ああいへばこういふをんな夏終る

しなればならぬことなし夏が逝く

初メール「うふふ」の返事待つ良夜

落ち蟬の細き手合掌夕間暮れ

十六夜や互ひの気配で背を向ける

安藤 晃一

STや終戦の日の秋田行

かまきりや三和土(たたき)でポーズ剽軽に

照り返すタイトル鮮やか秋に入る

赤の映えゆらりゆらりと百日紅

ゴルフ場に渡り雁降り小休憩

秋めくと猛暑の中の会話かな

長尾 進一郎

夏休み宿題の夢いまだ見る

七月の太陽遠慮せず主役

雷の落ちし気配や隣町

雑草の伸びや草取り追ひつかず

電柱の揺らぎて見ゆる炎暑かな

緑蔭に仲間の集ふ昼食会

西川 知世

秋蝉の声を細らせ摩天楼

渡航記録の印薄れゐて涼新た

「TOKIO」に光波打ち夜半の秋

鬼灯の赤の灯れる地藏堂

物干せば秋蝉の声しきりなる

丸太橋渡りてよりの虫の闇

次回は令和七年十月二日(木)。兼題は「月」(中村晃也さん出題)、席題は西川知世さん出題の「実」です。

季語を学ぶ 初学にかえつて

西川 知世

今回は「月」が席題となった。日本で古来より愛
でるものに「雪」「月」「花」と大きく三つがあ
る。歌人、詩人が大切にしてきたものである。

私事で恐縮ではあるが、住んでいたマンション
の階上からの水漏れ事故遭難のために、現在、世
に言うタワーマンションに仮住まいの身。居住階
のはい階建ての10階で微妙な高さにある。平地
に住んでいた私には十分に高い。横浜の花火大会
も遠くビルの上に見えだし、朝のカーテンを開け
るとスカイツリーの向うに山脈らしきものが霞み、
羽田や成田の発着の飛行機が大東京の上を低く飛
ぶ。月は少し近くに感じられ、大きい。

屋上には申し込めば入れるらしいので、高所恐
怖症の私ではあるが、我が家に戻る前に申し込ん
でみようかと迷っている。武蔵小杉駅から10分
少しの立地だが、二ヨキ二ヨキとタワマンが建っ
ている中、通勤の人が大勢歩いている街に突然迷
い込んだ感じは否めない。この街にはそぐわない
生活をしながらなんとか半月経った。造られた街
の美しい小さな公園は整備され、虫の音も秋の花
も鑑賞することができている。

父がつけしわが名立子や月を仰ぐ 星野立子
風立ちて月光おの坂ひらひらす 大野林火
月光も近寄りがたく浅間燃ゆ 及川 貞
月の人のひとりとならむ車椅子 角川源義
やはらかき身を月光の中に容れ 桂 信子
月光の象番にならぬかといふ 飯島晴子
月を待つシヤンパンの栓ぼんと抜き 星野椿
竹伐つて月の光に打たせあり 長谷川權
かろき子は月にあづけむ肩車 石 寒太

浮世の月見過しにけり末二年

西鶴

月はやし梢は雨を持ちながら

芭蕉

かつしかや月さす家は下水端

一茶

月光をふるはず桐の虫一つ

蛇笏